様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　3　月　31　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520379
研究課題名（和文）言語文化教育素材としてのテクスト種ウィット
ーその潜在的可能性に関する基盤的研究
研究課題名（英文）Joke texts as material for intercultural teaching
- a study to exploit their potentialities

研究代表者
植田　康成（UEDA YASUNARI）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60009735

研究成果の概要：公刊論文 5、国外及び国内学会での発表 4、自主的に作成した冊子体の最終報告書（A4、152 頁）が具体的成果である。公刊した 5 つの論文の題目から分かるように、テクスト種ウィットの持つ言語文化教育素材としてのいくつかの可能性（文法教材、ドイツ語の変種、ランデスクンデ、異文化理解）を探求、確定し、具体的な取り扱いの提案を行うことができた。テクスト種ウィットがもつ言語文化教育素材としての可能性のさらなる探求の方向性、研究の可能性を確認しえたことも、もう一つの成果である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	500,000	0	500,000
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：テクスト種ウィット、言語文化教育、異文化研究、ランデスクンデ、ステレオタイプ

１．研究開始当初の背景

ウィットに関しては、哲学・深層心理学、社会心理学といった様々な分野において研究が行われてきている。そういった研究は、ウィットの中に人間の本性や、社会事象の反映を読みとろうとするものである。ナチ時代の「ささやきのウィット」、ソビエト時代のウィット、かつての東ドイツにおけるウィット、といった政治的ウィットは、語ること自体がまさに自らの命を賭けた行為であり(R. Reiter, Der "heimtückische" Witz im Dritte Reich

als politisches Gleichnis, 1997)、対抗言語文化を構築する勇気ある行為であった(A. Schiewe/J. Schiewe, *Witzkultur in der DDR. Ein Beitrag zur Sprachkritik*, 2000)。ウィットには人間の歴史が読み込まれてもいるのである。外国語学習の背景的知識に関する素材として有用であるゆえんである。

1970 年代以後におけるテクスト言語学の展開の中で、テクスト種ウィットの言語的特徴が探求されてきた(一例: B. Marfurt: Textsorte Witz, 1977)。そして、テクスト種ウィットの言語的特徴の理解を目的とする教授法に関する試みも行われた(一例: W. Ulrich: *Der Witz im Deutschunterricht*, 1980)。しかし、外国語学習のための素材として、テクスト種ウィットがどのような潜在的可能性を有しているかについての総括的、体系的な研究は、現在までなされていなかった。

1980 年代以後における社会言語学(Soziolinguistik)、変種言語学(Varietätenlinguistik)の飛躍的な展開を承けて、テクスト種ウィットを素材にドイツ語の変種(Varietät)、変異(Variante)に関する知識の習得を目的とする授業の提案をマーヒャ(J. Macha, *Sprache und Witz. Die komische Kraft der Wörter*, 1992)が行っているが、それに続く試みはなかった。

そして、1990 年代に大きな展開を見せた言語研究における認知的転換(kognitive Wende)は、テクスト種ウィットに関する研究にも新しい研究方向をもたらした。スクリプト(Skript)という認知言語学の概念を軸にした英語圏におけるジョークのメカニズムに関する研究(たとえば S.Attardo/V.Raskin, *Script Theory Revis(it)ed: Joke Similarity and Joke Representation Model*, 1991)に端を発している。しかし、ドイツ語圏における研究においては、まだ十分な展開を見ていなかった。

テクスト種ウィットは、これまでも外国語授業の中で教材として使用されてきてはいる。しかし、その取り扱いは、周辺的なものにとどまっている。たとえ、テクスト種ウィットが集中的に教材として投入されている場合でも、その取り扱いは、文法事項を説明するための言語素材あるいは語彙習得のための素材として利用されているにすぎない。

涙なしの、そして笑いありの語学教育を希求して、ウィット(ジョーク)は、従来も教材として利用されてきてはいた。しかし、ウィットのテクストそのものに言語文化教育の題材を探索し、分析、考察、詳述するという方向の研究と、それに基づく取り扱いの提案はなかった。単なる語学教材としての利用価値にとどまらず、言語文化教育素材という観点からテクスト種ウィットの可能性を追求するという観点は、見られなかった。そのような状況を背景として、本研究は構想され、遂行された。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者がこれまで遂行してきた「日独イディオム対照研究」及び「カリカチュアを素材とするイディオム学習・教授法に関する基礎研究」をさらに拡大・発展させるべく構想されたものであった。その目的は、テクスト種ウィット(Textsorte Witz)に関するこれまでの言語学的研究を踏まえて、テクスト種ウィットが潜在的に有している言語文化教育素材としての可能性を追求し、外国語(ドイツ語)授業の中でテクスト種ウィットを、どのように取り扱う可能性があるかについて、具体的提案を行うことであった。

研究代表者は、30 年近く前からウィットに関心を抱き、ドイツ語援業における取り扱いについて考察してきている。近年は、イディオム学習・教授法について考察する中で、テ

クスト種ウィットの持つ有用性に目を向けることになった。ウィットを理解するには、きわめて高度の言語能力のみならず、百科全書的とでもいうべき該博な知識の稼働が要求されるというのが、研究代表者の長年の考えである。学習対象言語におけるウィットを十全に理解し得る言語能力、背景的知識の習得を外国語学習の目標とすることこそ、異言語文化理解にとって必要不可欠であると考える。

本研究は、ウィット研究に関するさまざまな視点の整理から始まり、言語学的なウィット研究の概括、そして、テクスト種ウィットを言語文化教育において取り扱う、どのような可能性があるかを、さまざまな言語学的視点から究明しようとするものであった。研究開始時点における資料収集、分類のための視点としては、1.テクスト種ウィットの特徴(形式的、意味的特徴)と機能(心理的、社会的機能)、2.学習対象言語に関する語学教材(文法教材、語彙学習教材)としてのテクスト種ウィット、3.学習対象言語に関する(言語の歴史、言語変種、社会集団語、状況語(レジスター)等に関する)言語素材としてのテクスト種ウィット、4.ランデスクンデ(歴史、文化、政治、経済、地理等に関する)教材としてのテクスト種ウィットといったものが考えられた。そしてまた、それらの観点から、テクスト種ウィットの言語文化教育素材としての可能性を追求すること、そして、具体的な授業提案を行うことが、本研究の目的であった。言語文化教育に一つの新鮮な視点を持ち込み得るものとの確信に支えられての研究であった。

３．研究の方法

初年度においては、補助金が、年度後半に交付されることになったので、資料収集およびその消化、そして考察というのが、研究遂行の実質をなした。

第 2 年度からも、ドイツ語のウィット集を可能な限り多数収集することに努めた。しかし、研究そのものは、言語文化教育の観点から設定したテーマ(ドイツ語文法、異文化理解、ランデスクンデ、ステレオタイプ等)に沿うウィットのテクストを抽出して、分析した結果に基づいて、考察、論述するという方法に従って行った。とりわけ、当該ウィットの落ちが、設定された上記のテーマに関わっているものに照準を合わせて収集、分析し、どのような教授法、学習法が可能かについて考察し、論述するという方法をとった。

４．研究成果

公刊した 5 つの論文のタイトルが示しているような項目（ドイツ語文法、ドイツ語の変種、ランデスクンデ、異文化理解）を策定し、テクスト種ウィットが持つ言語文化教育素材としての利用可能性として、いくつか具体的な取り扱いを含めての教授法・学習法に関する提案を行つたことが具体的研究成果である。異文化理解におけるステレオタイプの流入、継承においてウィットが果たしている決して軽視できないネガティブな役割にも目を向けることができた。この点は、とりわけ、学習者が未だ自立的、批判的思惟を確立していない場合には、取り扱いに慎重を期す必要があるという認識に至る。学会発表の 1. は、そのような趣旨の考察を展開したものである。

もちろん、テクスト種ウィットが有する言語文化教育素材としての利用可能性、取り扱いの提案についての探求は、その範囲にとどまることなく、視点を拡大しつつ、今後も続く。例えば、ウィットを素材として、哲学的な考察へと誘うということも可能であろう。そしてまた、言語習得等の言語学的主題に関

する考察へと誘うことも可能であると信じる。これは近い将来の研究課題でもあり、研究の可能性でもあろうことを確認できたことも、成果の一つである。さらには、研究関心の射程を拡大して、日本における笑いの文化とドイツ語圏における笑いの文化の比較対照という観点から、テクスト種ウィットに見られる笑いを考察していくことも極めて興味深いであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

1. 植田康成「テクスト種ウィットに見る異文化理解」『ニダバ』第 38 号、2009 年、147-156 頁(単著)、査読あり
2. 植田康成「テクスト種ウィット分類の試み」、『ニダバ』第 37 号、2008 年、86‐95 頁。(単著)、査読あり
3. 植田康成「言語文化教育素材としてのテクスト種ウィットーウイットに見るランデスクンデー」、『広島大学大学院文学研究科論集』第 67 巻、2007 年、55‐73 頁。(単著)、査読なし
4. 植田康成「言語文化教育素材としてのテクスト種ウィットーウィットに見るさまざまなドイツ語―」、『ニダバ』第 36 号、2007 年、47‐56 頁。(単著)、査読あり
5. 植田康成「言語文化教育素材としてのテクスト種ウィットーウィットに見るドイツ語文法」、『広島大学大学院文学研究科論集』第 66 巻、2006 年、67‐87 頁。(単著)、査読なし

〔学会発表〕（計 4　件）

1. Ueda, Yasunari, Textsorte Witz - deutsch-japanisch interkulturell betrachtet -. Internationaler Kongress "Philosophie der Interkulturalität", 17. October 2008, Graz/Austria.（単独）
2. 植田康成　「テクスト種ウィットに見る異文化理解」、「西日本言語学会」、於広島市広島市立大学、2008 年 9 月 20 日。（単独）
3. 植田康成　「ウィットに見るドイツ・ランデスクンデ」、「西日本言語学会」、於福岡市九州産業大学、2007 年 9 月 15 日。（単独）
4. 植田康成　「ウィットに見るドイツ文法」、「西日本言語学会」、於広島市広島文教女子大学、2006 年 9 月 2 日。（単独）

（なお、上記「研究成果」でも記したように、提出を求められていたわけではないが、等挙計画していたことでもあったので、冊子体の研究報告書（A4、152 頁）を作成して、求めに応じて配布した。）

６．研究組織

(1)研究代表者

植田　康成（UEDA YASUNARI）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60009735

(2)研究分担者

(3)連携研究者